

# 編集の序

2007年にがん対策基本法が施行され、はや10年が経過しました。10年前に比べて、「多くのがん患者が質の高い治療を受けられるようになった」、「がん患者の生存期間は延長している」と実感している医療スタッフは、少なくないと思われます。この間、「がん対策推進基本計画」は2回にわたり計画・実施され、近く第3期計画が策定される予定です。このように国を挙げてさまざまな課題に取り組んできた成果の中で、特に「がん薬物療法の進歩」が果たしてきた役割には計り知れないものがあります。

一方で、がん患者の予後が延長することによって、以前は顕在化することのなかった新たな課題が浮かび上がってきました。例えば、併存症を有する患者など、以前なら治療対象にならなかったハイリスク患者が、がん薬物療法を受けるケースはその典型です。インフォームド・コンセントで注意すべき点は何か、治療の優先度をどう考えるか、予想されるリスクは何かなどの問題に直面するケースも多いと思われます。そんなとき、断片的な知識や情報をつなぎ合わせながら、限られた経験や勘を頼りに手探りでなんとか対応しているのが現実です。

本書では、これらの問題点について、臨床の最前線で活躍しているがん専門薬剤師が得られる限りのエビデンスを整理しつつ、それぞれの臨床経験を活かしながらまとめています。項目によっては症例を提示することによって、理解を深める工夫がされています。また、インフォームド・コンセントのコツや看護ケアの具体例などをがん薬物療法専門医やがん専門看護師らがコラム形式で執筆し、多職種チーム医療を実践するためのコツも満載です。総じて、多様化・複雑化する患者への治療戦略を身につけ、明日からの診療にすぐに活用できる、そんな実践的なハンドブックとなるように心がけました。

本書が、がん薬物療法に携わるすべての医療スタッフにとって良きハンドブックとなり、ひいては、社会に治療に苦しむ患者さんを支えることができれば、编者としては限りない喜びです。

2017年7月

安藤雄一，寺田智祐